



神道(八)(大和世界の建設)

竹葉 秀雄

古事記

宇宙の創始

「〇(零)」のとき

それでは、この虚しく空なる〇は、果して本当に何も無い空なのであろうか。何も無い無から有が生じるであろうか。〇が真に何も無い零であるならば決して「一」は生じない。実はあらゆるものを蔵した、一切の法、一切の神力、一切の蔵、一切の事を、すべて蔵した虚しさであり、空なのである。「真空妙有」なのである。「絶対無」なるが故に「絶対有」なる「絶対無」なのである。何を以てこれを証するか。

前述の数の世界に於ても〇から「一」が生じそれは無限に伸びて行く、「二」が生じたと同時に「一」が生じている。子が生じた時に母が生じたと同義である。「一」は「一」と同時に無限に伸びて行く。子の子は無限に生まれていく。親の親は無限の古に及び、「一」はつねに「一」と有って、合して〇に還える。子は母と合して一体の仁に復する。母子未だ分かれざる零に復する。〇は数の中心基準でもある。



単なる左右のみでなく、前後、上下、面、立体あらゆる関係に於て然りである。零は天之御中主神の世界であり、十は高御産巢日神、一は神産巢日神の世界である。現代の物理学もこれを明らかにせんとしているが、我々は之を他に求むに及ばない。一番確かなる自己の心にこれを証すがよい。宇宙内のことは自己の心に存するのである。

第 25 号
月 1 回 発行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所:愛媛県西条市
上市甲 720-1

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は国家の鎮護となります
- 一 私達は大和世界を建設します

よく働き、よく眠りて目覚めたる暁の心にこれを見よ。静坐調息一念不動の相にこれを観よ。主一無適誠敬を致せる自己の心にこれを看取せよ。鎮魂神に帰せる心にこれを体得せよ。湛然たる太古の静寂の中に、凝然として一念未生せず、太虚そのものの心である。この心こそ、火来れば火に応じ、水来れば水に応じ、春風となり、秋風ともなり、目高遊ぶ小川のせせらぎともなれば、百獸を驚かす万雷の滝津瀬ともなる。千変万化時に応じ機に発する心であり、森羅万象を現じる宇宙の相である。太虚の心、〇の心なのである。

自己に徹して是を観よ!

歴歴昭昭たる実相である。

「〇」は無限の数を含む「〇」であり、すべての数は「〇」より生じて「〇」に帰る。

「零」は万有を内蔵する「零」であり、すべての物は、「零」より発して「零」に復する。

「〇」は未だ「一」を発せざる「〇」であり、初め終りなき永遠の「〇」の時であり、行きて極りなき無極の「〇」の処である。故に、何処も「〇」の時にあり、何処も「〇」の処にある。何時も永遠の時であり、何処も無窮の処である。

「〇」は円妙「〇」より発想された記号であらう。「〇」は玄妙思議すべからざる、何時も発動せんとする、零活なる「はじめ」であり「太虚」である。(以下次号)

第三章 農民生活の倫理的考察

菅原 兵治

第二節 批判

以上、概説せる諸態度に就き、左に私共の反省し考慮せねばならぬ点を述べて見たいと思う。而して是れ亦実は自らを修むる資料としたいが故である。

強義的態度

先ず第一に強義的態度であるが、之は第一節に於て、已に農民の理想とすべき態度であるということに就いて述べたこともあるし、今又改めて説く必要もないと思うので、其他の態度に就いて述べて見たいと思う。

無自覚的態度

無自覚的態度——素直に考えればこれではならぬということは何人も肯かれることであるが、然し實際世間に於ては案外此の態度若しくは之に近い態度を珍重する向が少くない。曰く、百姓に文句は要らぬ。唯黙って働けばそれでいいじゃないかと。黙って働く——それは勿論結構なことだ。農業に限らず、すべての職業皆然り、働く時はつべこべ文句を並べたてているよりは黙って働く方がよいことは勿論である。然し黙って働くということは、何も言うべき場合にも言い得ぬ労役の道具——農奴化した了うということではない筈である。言うべき義理道理も知らぬものが文句を言わぬからといって、それが格別尊いというものではあるまい。然も世間往々従来の主知主義的教育にこりこりして、義を解し、道を知り、学を修め、業を習い、説くべき場合に堂々説示喝破することまでを、所謂「文句」ということと誤解し唯牛馬の如く働くのを珍重する傾向が少くないようである。之に就いて山鹿素行の士道論中の次の一節は大いに啓蒙の砭針となるであろう。

「大丈夫の養い正しからざる時は、唯剛強なるを専らとして、衣服より飲食居宅の体、言語動容に至るまで、専らすねこぼりて、木のはしの如く取りまわし、是れ則ち大丈夫の法なりと思うの輩あり。甚だ以てあやまれり。(後略)——風度章」

尤も農道の本質より見てこの態度は、軽薄なる偏文的態度に比すれば稍愛すべき点もあるが、決して中正なりとは言い得ないものである。殊に日本農民は、大農組織の下に雇傭労役者として使役せらるる日傭的農業労働者とは大いに其の趣

を異にし、仮令五段百姓と雖も独立せる一家を経営し、男子ならば一度は必ず其の戸主となり、女子ならば必ず其の主婦となるのである。況んや一方、社会的に之を見れば所謂「公民」として、地方自治の事にも参画して行かねばならぬのである。無自覚的態度は決して其の生活を永安ならしむる所以のものではない。

猶此処に一言付け加えておきたい事がある。それは、無自覚的態度の者が働いて或る程度の産を成した後に伴い易い危険である。即ち無自覚的態度の者が働いて金がたまるようになると、内的理想精神に欠けているが故に、昨日までの勤勞的態度を一変して、兎もすれば外的享樂に趨ることなしとせぬものである。私共は世間往々にして此の事実を見るが、殊に無知な労働者の生活等を見る時、其の日常に於てかかる事例に接することが決して珍しくはないのである。深く考えねばならぬことと思う。

山崎闇齋先生自賛と新型コロナウイルス

三浦夏南

山崎闇齋先生自賛の中に「神垂祈禱、冥加正直」という言葉がある。簡単に説明すると神のお与えになる目に見えないご加護は、ひたすらに祈り、素直な心を持つ者に与えられるという意味である。この語の持つ深い意味に関しては、崎門学の泰斗近藤啓吾先生の著書に詳しいので割愛するが、ウイルス騒動に動揺する現在にあって、この言葉は心の支えに成るものと思う。人との接触を出来るだけ避け、手洗いがいを徹底するなど、物理的な対策ばかりが取り上げられるが、その根底にある魂の清浄を主としなければ、せつかくの物質的努力も裏目に出ることが多々あるであろう。病は気からという言葉もある通り、心に描いたものは肉体に表現されてしまうものである。私も幼少よりスポーツの世界で生きて来た為、体調の管理には人一倍気を遣わなければならなかった。特にチームスポーツであったので、大事な大会前にインフルエンザ感染者を出すとそれまでの皆の努力が無に帰する可能性もあった。元々心配性な性格もあって、手洗いがい、マスクなど出来る対策は徹底的に、異常なまでに行っていた時期もあったが、そういったときに限ってインフルエンザに感染してしまったという苦い経験もある。感染したくない、感染させてはいけなくと強く病気を掴み過ぎると、却って病気を呼び寄せてしまうものだと、体験的に気付いたものであった。高校時代の友人に、自分は馬鹿だから風邪をひかない、ひいても気付く頭がないから、生れてから風邪にすらかかったことがないと豪語していた人が何人もいた。彼等の無頓着は手放して称賛することは出来ないけれども、その確固たる自信は確かに結果として病を退けていたように思う。また少し体調が悪いと感じたら、敢えて全力で走り込みをしたり、水風呂に浸かって気合いを入れるという人もいたが、この人も常に健康を維持していた。中学校の同級生で、どれだけ寒い雪の降る日でも必ず半袖半ズボンで登校し、決して上着を身に付けないというポリシーを持った人もいたが、彼は学業も極めて優秀で、且つ皆勤賞であったと思う。心配性で対策ばかりに拘っていた私よりも豪胆なる彼等の方が、「本を重んずる」ということが、直感的に出来ていたのだろう。手洗いがいが大切なのは言うまでもないが、それは病の観念を魂の表面から禊祓う

という精神的浄化と一体のものでなければならぬ。

闇齋先生は克己の精神烈たる求道者であるが、その根底には常に神への祈りと子供のような素直で純真な真心を大切にされた方であった。この謙虚な神への祈りを抜きにして克己の修練に入ると、自己の弱小感から欲望を掴んでしまい、却って人欲に振り回されてしまう。先生は本を重んずるとともに、末の部分まで徹底される豪胆にして繊細な方であるが、本が出来ていなければ、末を幾ら励んでも効果はないどころか、かつて人の何倍も対策をしていた私がインフルエンザに感染したように逆効果になることすらある。コロナウイルスが猛威を振るう今こそ、祈りの原点に帰り、心を清浄に保ちたいものである。

とよくも農園だより

三浦 美恵

今月はネギ・アスパラガスの手入れ、春野菜の手入れ、夏野菜の播種、里芋の準備・定植を行いました。

まずビニールハウスで育てているネギとアスパラガスについてです。ハウス内は露地栽培と比較して湿度管理・水やりを経験や見極めが必要なため、栽培経験のある人に教えてもらいながら育てています。どちらも春の暖かな日差しを受け、日に日に葉が大きく成長しています。アスパラガスは一株から何



本もの茎がのびており、この調子で行けば六月から収穫ができるそうです。ネギは三箇所時期をずらして栽培していますが、ハウスで育てていたものは収穫できるまでに生長し、少しずつ地元の産直市へ出荷を始めました。

続いて春野菜についてです。春野菜を植えている畑は散歩圏内にあるため、二人の子どもを連れて様子を見に行ったり、収穫をしたり、新たな種を播いたりしてきました。秋に植えていた新玉ねぎがようやく獲れ始め、収穫したものはその日のうちに食卓に並びます。畑の様子や子供達の畑での様子を話しながら、シャキシャキの新玉ねぎをサラダにいただきます。ジャガイモ、大根、カブ、ニンニク、ブロッコリー、キャベツ、ケール、トウモロコシ、枝豆も伸びてきているので、収穫が待ち遠しいです。

次に夏野菜の播種です。トマト、ピーマン、キュウリ、ナス、シソ、ズッキーニ、ゴーヤ、白ネギ、スイカをセルトレーやポットに植えていきました。ビニールハウスで育てているのですが、少しずつかわいい芽が出てきており、様子を見に行くのが日々の楽しみになっています。この夏野菜は或る程度大きくなれば、庭にあるミニ菜園に定植しようと思っています。この畑は、今月頭まで空きスペースだった庭を耕し、牛糞石灰を入れて土づくりを行い、子どもたちが毎日水やりや様子を見にいける場所にしたものです。面積は六m×一〇mと小さいですが、毎日の水やりが家の水道から

できることや、子どもたちの遊び場・仕事場になることから急ぎよ作りました。今年の夏は、この畑からもたくさん野菜を収穫できればと思います。

最後は里芋の準備・定植についてです。今年的主力となる里芋ですが、その畝をたててマルチを張るためのマルチャーという機械が、ついに届きました。畑は、濡れたままの状態です耕すといびつな形に土が固まり、里芋の生育にも良くありません。また肥料を入れた後に雨が降ってしまうと、その肥料が流れ、土も固まってしまいます。そこで、畑が乾いている状態で、雨の前に肥料をふって耕耘し、マルチを張るといふ一連の作業を終えてしまわなければならない私達は、一気に四反分の畑を耕耘し、その後マルチャーをトラクターに付け換えてもらってからでなければマルチ張りができません。天気予報を確認すると、五日後から一週間程度の雨が降ると分かり、朝は六時から、夜は日の入り後ライトをつけて七時過ぎまで、ほぼ休憩無しで作業をして行きました。注文したばかりでマルチの調整がうまくいかず、どうなることかと心配しましたが、五日間で何とか雨の前日の夕方に準備が終わった時には、達成感で一杯でした。その後、土が乾いた畑から写真左の移植機を使って里芋を定植し、今年秋の秋冬にたくさんの里芋が収穫できるように、日々見回りをしながら大切に育てて行くかと思っています。



★今後の予定

来月も、今月に引き続き勉強会は休止致します。復帰の目途が立ちましたら、本稿にてご連絡差し上げます。

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

- | | |
|----------|-----|
| ・ 一般会員 | 三千元 |
| ・ 賛助会員 | 一万円 |
| ・ 特別賛助会員 | 三万円 |
| ・ 支援会員 | 一万円 |

